

主编 汤重南

日 俄 战 争 史 料

18

綫裝書局

主编 汤重南

(第十八册)

日俄战争史料

线装书局

第十八册

日露文戰紀念錄(一)下卷

内田安藏 吉田文彦 著

明治三十九年三月

.....一

下卷

日露交戰紀念錄（一）

内田安藏 吉田文彦 著

明治三十九年三月

海軍々令部長 東郷平八郎閣下題字
海軍大將
海軍中將 瓜生外吉閣下序文
内田安藏 吉田文彦 共編

日露交戰紀念錄

下卷

東京 東江堂藏版

志

力

義我死

東郷平八郎書

序

東江堂主人内田安藏君日露交戰紀念錄を袖にし來り予に序を迫る予や素と水艦の一武辨未だ曾て文法を學ばず奈何ぞ點綴せん已むなくんば予之を我上官に乞はんと内田君肯はずして曰く本書の序文は閣下の筆に成るにと既に業に之を地方公衆の前に披露せり今に迫んで焉ぞ之を變更するを得んやと乃ち該書一本を置て去る予受て之を讀むに行文の平易にして雄壯なる記事の正確にして周密なる細大漏すことなく精疎遺すことなく端を尋ね尾を探り以て大勝を全卷に收む正に是れ机に凭り戰を觀せしむる

もの現下の珍本後世の好紀念錄たらずんばあらず聊か卑
見を陳して内田君の責を塞ぐこと斯の如し

明治三十九年二月九日

満天の飛雪を眺めつゝ舷窓の下

瓜生外吉識

玉の御聲

聖上^{せいじやうくわう} 皇后^{こうう}兩^{りやう}陛下^{ていか}下^げとも雙^{ふた}びまして和歌^{わか}に御堪能^{ごたんのう}にあらせらるゝことは内外^{ないぐわい}臣民^{しんみん}の欽仰^{きんげう}する所^{ところ}なり而^{しか}して從來^{じやうらい}毎年^{まいねん}一月^{いつがつ}歌御會^{うたごんかい}始^{はじめ}の外^{ほか}は御製^{ぎよせい}御歌^{ごんかうた}とも公^{おほ}けにせられざるにより平生^{へいぜい}遊^{あそ}ばさるゝ尊^{たふ}とき御詠^{ぎよえい}も伺^{うか}ふことを得^えず只^{ひたすら}管^{くだ}惜^おしきことゝ思^{おも}ひ居^をりしに開^{かい}戦^{せん}以來^{いらい}軍國^{ぐんこく}の御事^{ごんこと}繁^{しげ}き中^{なか}より軍隊^{たい}の狀^{じやう}況^{きやう}を思召^{おほしめ}され御軫^{ごしん}念^{ねん}の餘^{あま}り詠^よませ給^{たま}ひし御製^{ぎよせい}御歌^{ごんかうた}の數^{すう}千^{せん}首^{しゆ}あるが中^{うち}より敬^{けい}唱^{しやう}せらるゝを密^{ひそ}かに洩^もれ伺^{うか}ふことの光榮^{くわうえい}を得^えたるにより謹^{つひ}みて記^{しる}し奉^{たてまつ}り御聖德^{ごせいとく}を仰^{あふ}ぎ慕^{した}ふの一端^{たん}に供^{きやう}せん

御製

きたひたる劍の光りいちしるく

よにかゝやかせわかいくさ人

いかならむ藥すゝめて國のため

いたておひたる身をは救はむ

山を抜くひとのちからも敷島の

大和こゝろそもとゐなるへき

石たゝみかたき砦もいくさひと

身を捨てゝこそうち碎きけれ

まきしなの大和心の雄々しさは

事あるときそあらはれにける

夢さめて先つこそ思へいくさ人

向ひしかたのたよりいかにと

兒等は皆軍のにはに出て果て、

おきなやひとり山田もるらむ

千早振神のこゝろにかなふらむ

わか國たみのつくすまことは

四方の海皆はらからと思ふよに

なとあた浪のたちさわくらむ

いそのかみ古き例をたつねつ、

あたらしきよのことも定めむ

あさみとり澄み渡りたる大空の

廣きをおのかこゝろともかな

つはものゝ心とともに乗る駒も

つかるゝ知らていや進むらむ

益荒雄に旗を授けておもふかな

日の本の名をかゝやかすへく

はしむして月見るほとも戦ひの

にはのありさま思ひやりつゝ

靖國神社合祠祭の御製

世とともに語りつたへよ國の爲

命を捨てしひとのいさをを

仁

國の爲あたなすあたを挫くとも

いつくしむへきことな忘れそ

親

國のため斃れし人を惜しむにも

思ふはおやのこゝろなりけり

牛

つはものゝ糧も秣もはこふらひ

牛もいくさのみちにつかへて

盃

あつかにも世は治まりて歡ひの

さかつきわけむ時そ待たる、

筆

國のためふるひしふての命毛の

あところ残れよろつよまで

述懷

國を思ふ道にふたつはなかり梟

いくさの庭にたつもたゝぬも

世の中は高き卑しきほとほとに

身を盡すこそつとめなりけれ

深夜述懷

軍人いかなる野邊にあかすらむ

蚊の聲しけくなれるこの夜を

夏述懷

政事出て、聞くまはかくはかり

あつき日なりと思はさりしを

祝言

うけつきし國の柱のうこきなく

さかゆる代々をなほ祈るかな

寄國祝

國民はひとつこゝろに守りけり

とほつみおやの神のをしへを

植物苑

我國に茂りあひけりとつくにの

草木のなへもおはしたつれは

寶

傳へ來てくくの寶となりけり

ひしりの御代のみことのり文

皇后宮御歌

國民をあはれみ玉ふひとことの

たまの御聲そ世にひゞきける

戦ひのかちの便りを聞くことに

みいくさ人の身をおもふかな

あてひとも心あはせて國のため

いわたおふ身をもるよなり梟

國の爲いたて負ふ身を寫し繪は

見るになみたそ催はされける

頼もしき何はあれとも戦かひに

かたてはやまぬ大和たましひ

國のため心つくしてかちいくさ

祈るかうれししもかしもまて

寒夜埋火

大宮の火桶のもとさむき夜に

みいくさ人はしもやふむらむ

時宗神社建立の節

仇波はふたゝひよせすなりに梟

鎌倉山の松のあらしに